A lush field of purple and white flowers, likely chrysanthemums, with numerous butterflies fluttering around them. The scene is bright and colorful, with green foliage and stems visible. The background is slightly blurred, showing more of the same floral landscape.

THINK NATURE コンセプトノートシリーズ ドキュメント #3

自然に優しいアクションを理解する

Understanding nature-friendly actions



## 自然に優しいアクションを理解する

Understanding nature-friendly actions

シンク・ネイチャー サイエンスチーム

Version 1, November 2025

### エグゼクティブ・サマリー

自然に優しいアクション nature-friendly actions は、人間によるさまざまな圧力にさらされる自然を保全・再生し、生物多様性や生態系サービスを支えるために実施できるアクションです。こうしたアクションを理解するための基準には、生物学的な対象、対応する圧力の種類、そして時間的枠組み、空間的範囲、知識基盤の向上という目標など、一般的な要素が含まれます。

行動は大きく分けて 2 つのタイプに分類できます。情報アクション information actions と実装アクション implementation actions です。情報アクションは、政策や協働的な取り組みの改善、あるいは種ごとのニーズや圧力の影響などに関する理解の向上を目指すものです。情報的行動は、現場レベルで即時の効果をもたらすものではありません。一方、実装アクションは、現場で自然にプラスの効果 nature-positive effects をもたらすものです。これには、空間的な影響の回避 spatial impact avoidance と、保全地域の設定 protected area establishment、生息地の回復管理 habitat restoration、生息地の維持管理 habitat management といった能動的な保全措置の実施が含まれます。これらの自然に優しいアクションのより詳細な分類体系は、目的や運用上の仕組みに関する解説とともに、文書内で示されています。

異なる行動は、それぞれ異なる効果とコストを持ち、適した状況も異なります。また、行動に関する定量的な理解の深さにも大きな差があり、経験的に十分知られているものもあれば、ほとんど試されたことのないアイデアにとどまるものもあります。ケンブリッジ大学が維持しているエビデンスベースでは、世界中で実践されてきた何千もの保全行動に関する多様な情報が蓄積されています。自然に優しいアクションは、生物多様性オフセット(ドキュメント #5)、生物多様性クレジットの創出、ハビタット・バンキング、さらには生物多様性と生態系サービスの持続可能性を目指すあらゆる活動の中核をなす要素です。局所的な効果に加え、行動の空間的な配置 spatial allocation は、その行動が実施される地域的な文脈を考慮することが望ましいとされています(ドキュメント#4)。

本書は、シンク・ネイチャーが人と生物多様性の関わりを理解したい方々に向けて提供するコンセプトノートシリーズの第 3 号にあたります。続くドキュメント#4 と#5 では、本ドキュメントで述べた重要な応用分野について、さらに詳しく論じています。

## 1. はじめに

人間の行動は、生物多様性に対して負の影響も正の影響も及ぼす可能性がある。人間活動によって生じる圧力の場合、その影響は負のものである。一方で、自然や生物多様性のために意図的に行われる自然に優しいアクション(介入 interventions と呼ばれることもある)の場合、その影響は正のものとなる。本ドキュメントの主題はこの後者である。自然に優しい戦略とは、長期的に一連のアクションを実施し、相乗的な効果を達成することを目的とするものである。自然に優しいアクションの主な分類は、以下のような基本的特徴を持つ。参照＞負の影響についてはドキュメント#2 において詳説されている。

- 情報収集 information: アクションをよりよく理解し、将来より良い意思決定を行うために情報を集める(セクション 3)。
- 影響回避 impact avoidance: 空間的デザインや技術的手法によって生態学的損失を最小限に抑える(セクション 4)。
- 保護地域の設定 protected area establishment: その地域に影響を与える圧力を減らし、生息地や種の個体群の回復につなげる(セクション 5)。保護は将来の損失を回避する助けにもなる。
- 生息地の回復 habitat restoration: 生態学的状態が劣化した生息地に対して行われる。通常は、生息地の構造的特徴に関する過去の損傷を修復し、より自然な状態への回復を目指す(セクション 6)。
- 生息地の管理 habitat management: 草地や草原など、自然遷移によって失われるおそれのある生息地を維持するために行う。放置すれば低木に覆われてしまう可能性があるが、放牧や刈り取りによって開放状態を保つ(セクション 7)。

図 1 は、本コンセプトノートで取り上げる自然に優しいアクションの上位階層的分類を示している。

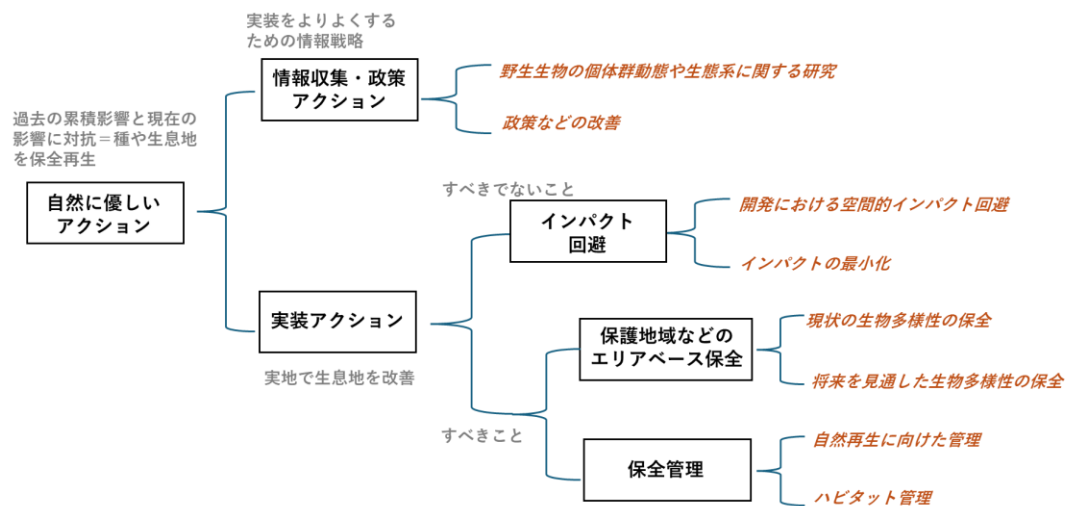


図 1 自然に優しいアクションの上位階層構造。文献で説明されるアクションの中には、このツリーの複数の枝にまたがる要素を組み合わせているものもあることに注意が必要である。ただし、多くのアクションは単純であり、この分類体系にそのまま当てはまる。

セクション2では、自然に優しいアクションを理解し分類するための基準について説明することから始まる。その後の章では、図1に示された分類ツリーの主要な枝について検討する。本書で扱うテーマは非常に幅広いため、ここでは主要要素やアクションのタイプについて述べ、いくつかの例を示すにとどめる。その広がりを見せる一例として、ケンブリッジ大学(英国)が運営する Conservation Evidence<sup>1</sup> データベースには、3500件を超える保全介入に関する特性と効果のエビデンスが蓄積されている。これらの多くは、特定の地域における特定の生息地や種に固有のものである。

<sup>1</sup> Conservation Evidence <https://www.conservationevidence.com/>

## 2. アクションの理解のためのメカニズムに基づく分類基準

アクションが何を目的としており、どのような効果をもたらすのかを理解するためには、その生態学的メカニズムを考慮することが有用である。表 1 には、特定のアクションの意味を理解するために用いることができる基準を示している。ここで紹介する要素は、この後の本文中でも参照される。

アクションから得られる生態学的な効果には、以下の主要な要因が影響する。第一に、現場での実施が含まれているかどうか。第二に、そのアクションが恒久的なものか、一時的で数年間のみのものか。第三に、生物学的な対象範囲がどの程度広いのか、である。たとえば、森林の回復や保護は、多くの森林性の種に利益をもたらす、生物多様性に対して広範で長期的な効果を生むアクションの例である。これに対し、移動の補助 assisted translocation は、非常に限定的な効果を持つアクションの例である(セクション 6 参照)。

**表 1** 自然に優しいアクションを評価するための、各アクションの効果の背後にあるメカニズムに基づく主な分類基準。多くのアクションはこれらの基準のごく一部を用いて分類できる。

要素	説明
一般	
実装か情報収集か	その行動は情報の収集なのか、現場での実施なのか、それともその両方なのか？
アクションの生物学的対象は何か	行動の対象は単一種か、複数種のグループか、生息地レベルの行動を通じた種群か、生息地タイプそのものか？ 生態系サービスも対象となっているか？
アクションの期間	その行動は恒久的か、一時的か(どのくらいの期間か)？ 一時的な場合、得られた効果は数年で失われる可能性がある。
空間的範囲	関心の空間的スコープは、局所、地域、国、または大陸／地球規模のいずれか？
時間的枠組み	検討対象は過去の影響、現在の状態、あるいは将来の生物多様性／圧力の状態か？
変化への姿勢	行動は変化に抵抗するものか、変化を受け入れて回復力を高めるものか、それとも新たなシステムへの変革を積極的に促すものか？
コスト	行動のコストや機会費用は考慮されているか？
嗜好・価値観	人々の嗜好や価値観が焦点になっているか？
能力構築	能力構築(キャパシティ・ビルディング)が目的に含まれているか？
管理方針	管理方針や目標の評価・改善が目的となっているか？
市民参加	一般の人々の参加が促されているか？
コミュニケーション	科学者、行政担当者、ステークホルダー、または一般市民など、誰に対してどのような形でコミュニケーションが行われているか？

生物学的対象	
生息地レベルでの効果	どの生息地がどのように支援されているか？ (i)構造的特徴の改善、(ii)構造的特徴の維持、(iii)生息地の保護、などどの側面が関係しているか？
保護地域の内外	行動の焦点は保護地域の内部か、外部か、あるいはその両方か？(外部＝生息地以外の土地タイプを含む「ハビタット・マトリックス」)
生息地の分断・連結性への関与	行動はパッチサイズや空間パターン、生態学的回廊(コリドー)、ステッピングストーン、その他の景観要素など、生態的連結性の効果に焦点を当てているか？
対象となる種	特定の種を直接対象としているか？
種個体群動態の要素	(i)生息適性(環境収容力)、(ii)死亡率、(iii)繁殖、(iv)分散・連結性、(v)種間相互作用など、個体群動態のどの要素に関係しているか？
生態プロセス・生態系サービス	生態学的プロセスや生態系サービスを対象としている場合、それはどのようなものか？
対象となる圧力	
どの圧力を対象としているか	関心のある圧力には、(i)気候変動、(ii)汚染、(iii)外来種、(iv)生物資源の利用、(v)生息地喪失、(vi)生息地分断(連結性)、(vii)自然環境の改変、(viii)人の存在、(ix)騒音などの局所的攪乱、などが含まれる。
圧力に対する活動のタイプ	行動は (i)圧力の影響、(ii)圧力の空間的分布、(iii)圧力への対抗手段のいずれに関係しているか？

### 3. 情報アクション

情報アクションは、現場での直接的な実施を伴わないことが特徴である。これらのアクションは、将来的に現場での実施をより効果的に行うために、手法や方針の改善を目的とすることが多い。

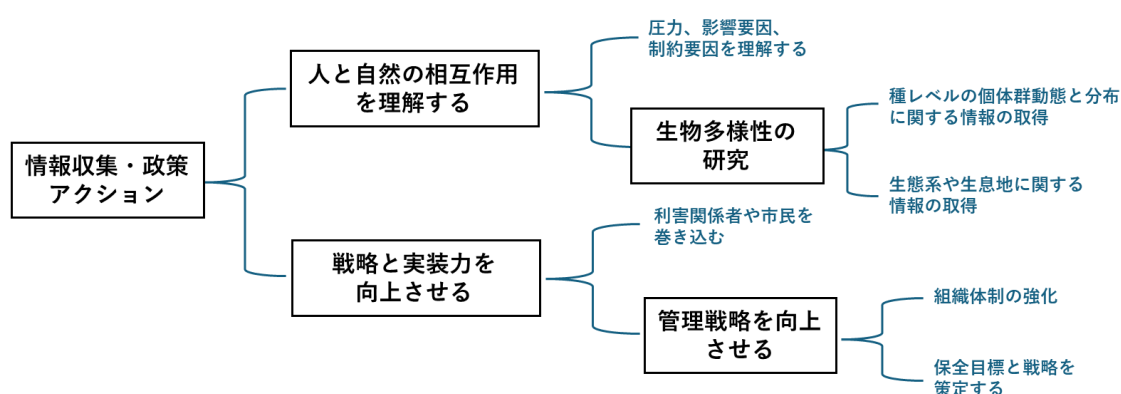


図2 情報および政策アクションの階層構造。

このツリーの主な区分は、「生物多様性やそれに対する圧力の調査・研究」と「政策および能力の向上」に分かれている。研究の対象は、一般的な圧力、種、生息地、そしてそれらの相互作用である。種のレベルでは、さまざまな種類の研究が行われている。これは、特定の種の個体群動態や分布全体を扱うこともあれば、分散行動や過剰死亡の原因など、動態の一側面に焦点を当てることもある。種に関する研究領域では、種分布の統計モデル化が一般的な手法となっている。気候変動は、科学文献において最も多く研究されている圧力である。また、一部の研究では、圧力の背後にある要因、例えば人口増加や一人当たり消費量の増大などを扱っている。

キャパシティビルディングおよび政策の改善は、三つの主要な分野に分けられる。一つは管理方針の改善であり、これには制度的な能力構築（研究能力の向上、情報利用の改善、調整と協働の強化）や、保全目標・方針の設計といった活動が含まれる。もう一つのタイプは、自然に優しい活動への一般市民やステークホルダーの関心・参加を高めることであり、教育活動や世論への働きかけなどが含まれる。

## 4. インパクト回避 Impact avoidance

インパクト回避 Impact avoidance は、自然に優しいアクションの分類ツリーにおける主要なブランチの一つである。ここで焦点となるのは「行動の実施」ではなく、「行動の抑制(行わないこと)」である。影響回避には、主に次の2つの大きな枝がある。

### i. 空間的インパクト回避 Spatial impact avoidance

土地利用を、生態学的価値や生物多様性の価値の損失ができるだけ小さくなる場所に配置することである。空間的影響回避は、土地転換だけでなく、騒音や汚染などによって間接的にもたらされる影響にも適用できる。適切な空間データが利用可能な場合には、空間的優先順位づけ spatial prioritization を通じて実施することができる。

### ii. 技術的手法による間接的影響の最小化 Minimization of indirect impacts

騒音や汚染などの間接的な影響を、技術的手段を用いて最小化することである。一般的に、騒音、夜間照明、粉塵、汚染などの圧力は、適切な技術的手段を用いることで低減、あるいは完全に除去することも可能である。参照>ドキュメント#2 に間接的インパクトに関する詳細が記載されている。

重要なのは、インパクト回避は理解しやすく実践しやすいという点である。なぜなら、これは自らの設計や行動を制御する行動であるためである。したがって、多くの種に対して生息地回復が将来的にもたらすかもしれない利益を予測するよりもはるかに容易である。参照>インパクト回避アクションは重要であるため、ドキュメント#4 と#5 でさらに詳細を論じている。



## 5. 保護地域の設定 Area-based action; protected areas

保護地域(保護区)は、自然を保全する最も一般的かつ広く認識された手段である。歴史的には、景観的・自然的価値の高い場所、あるいは当時人間の利用がほとんどなかった遠隔地に設定されてきた。近年では、保護地域ネットワークの設計において、生物多様性全体のより良いカバレッジとネットワークの拡張が重視されるようになっている。2022 年には、生物多様性条約(CBD)により、「地球全体の 30%を保全地域として確保し、そのうち 3 分の 1 を厳格に保護する」という目標が設定された。

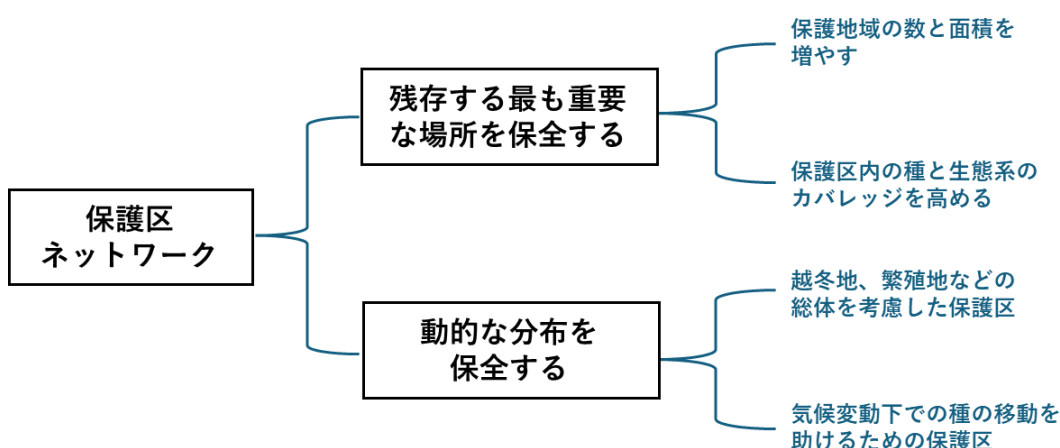


図3 保護地域ネットワークに関するアクションの階層構造

図3は、保護地域に関するアクションの上位レベルの分類を示している。主要なブランチの一つは、依然として生物多様性が存在する場所での保護である。これは、単純に保護地域の数や面積を増やす行動と、特定の種や生息地のカバレッジを改善するための保護地域の設定という2つの方向に分かれる。どちらの目的においても、限られた面積や予算の中で達成可能な効果を最大化するために、空間分析や優先順位づけ spatial prioritization が有効である。参照＞空間的優先付けについては、ドキュメント#4 に詳細がある。

もう一つの大きなブランチは、「動的な分布の保護」である。これは、景観(あるいは海洋景観)の中を移動する種、あるいは気候変動に伴って生息域を移動せざるを得ない種に関するものである。移動する動物の例としては、長距離の年周期移動を行うクジラ類などが挙げられる。気候変動による分布域の変化を予測する上で常に問題となるのは、将来的にどの程度の気候変動が実際に起こるのかが不確定であるため、気候に起因する分布変化の予測には信頼性が欠けるという点である。

保護地域の設立による効果の算定は、生物多様性オフセットの文脈で扱われる重要なテーマである。主に考慮すべき要因は 2 つある。(i) 景観の中でその生息地タイプがどの程度の速度で減少しているか、(ii) リークージ leakage である。リークージは、資源採取の圧力を受けている森林などの生息地で重要な要因となる。これは、ある場所で資源採取を止めても、その行為が別の場所に移動してしまう現象を指し、その結果として保護地域の設立による純粋な効果が減少してしまうことを意味する。参照＞こうしたメカニズムの詳細は、ドキュメント#5 で解説している。

## 6. 生息地再生のための管理 Managing for recovery

種や生息地の回復に向けた主要なアクションは、生息地の回復 habitat restoration であり、これは生態学の研究においても重要な分野である。すべての生息地タイプはそれぞれ異なるため、回復の運用上の詳細は場所によって大きく異なる可能性がある。例えば、森林と河川を比較すればその違いは明らかである。また、生息地の回復は、保護地域間に存在する生息地マトリックス(生息地としての価値が低い土地タイプと生息地が混ざった景観)内での土地利用を緩和することによっても促進できる(図 4)。これには、アグロフォレストリー(林農複合経営) agroforestry などの取り組みが含まれる。

生息地回復を促進するもう一つの重要な方法は、圧力の低減である。これは、生息地が自らの力で回復することを可能にする。なお、気候変動は科学文献で最も多く議論される圧力であるが、地域的な計画の観点では低減の対象とすべきではない。なぜなら、気候変動は局所的な行動で制御することがほぼ不可能な圧力であり、対照的に資源採取や汚染といった圧力は地域レベルで制御できるからである。言い換えれば、「自分たちが実際に影響を与えられる圧力」に取り組むことが重要である。

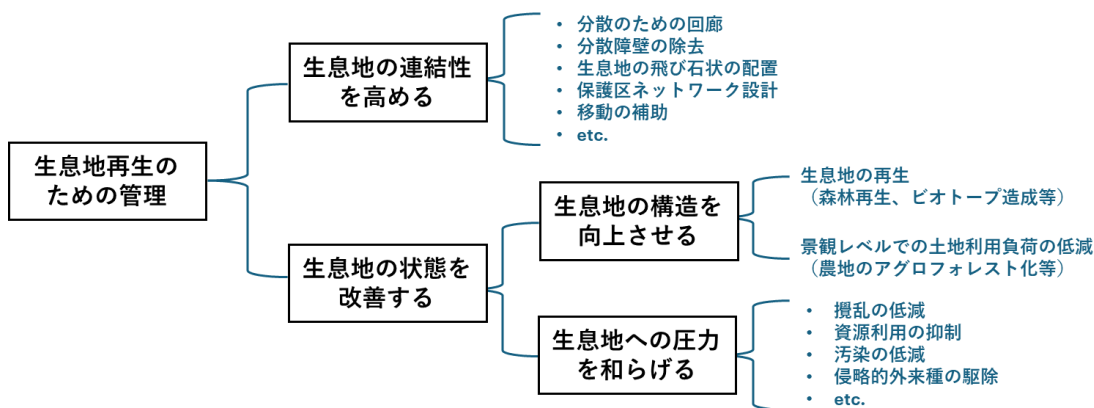


図 4 生息地の回復を目的とした管理に関するアクションの階層構造。これには、生息地回復のさまざまな形態、圧力の低減、分散および連結性の管理が含まれる。

種レベルで恩恵を与えるもう一つの全く異なる方法は、景観パターン landscape pattern、分散 dispersal、連結性 connectivity に焦点を当てるものである。これは科学文献の中でも非常に大きな研究領域である。連結性を高める方法にはさまざまなものがあり、種が移動できるような分散コリドー dispersal corridors の設置や、河川のダムなど分散を妨げる障壁の除去などが含まれる。移動の補助 assisted translocation は、個体のある個体群から別の個体群へ移動させることで、特定の種の分散を助ける非常に限定的なアクションの一例である。これは、過去にそ



の種が生息していた場所への再定着を試みる場合や、小規模な個体群の遺伝的多様性を高めるために行われることがある。参照＞ドキュメント#6 では、連結性に関わるアクションのメカニズムと効果を詳細に論じている。

## 7. 生息地維持のための管理 Managing for maintenance

生息地の回復と比較すると、維持のための管理の目的は、生息地や個体群の状態をおおむね安定した状態に保つことである。典型的な生息地管理の例としては、草原や牧草地が挙げられる。これらは、過剰な植生の繁茂を防ぐために放牧や刈り取りが必要となる場合がある。

個体群の適応的管理 adaptive management は、例えばシカなどの狩猟対象動物に対して、地域的な個体数をおおむね一定に保つことを目的として行われることがある。また、外来種の個体数を「十分に低い水準」に維持する目的で適用されることもある。能動的な管理には、毎年継続的な取り組みが必要となる場合があり、長期的には比較的高コストになる場合が多い。

別のタイプの管理としては、圧力の緩和 mitigation of pressures や保護地域のバッファリング（保護区周辺の緩衝エリアの設定）buffering of protected areas がある。これは、生息地の劣化を防止することを目的として行われるものである。なお、圧力の低減は多くの場合、生息地回復の一部でもある。つまり、同様の行動やその要素が、異なる目的で用いられる場合もある。

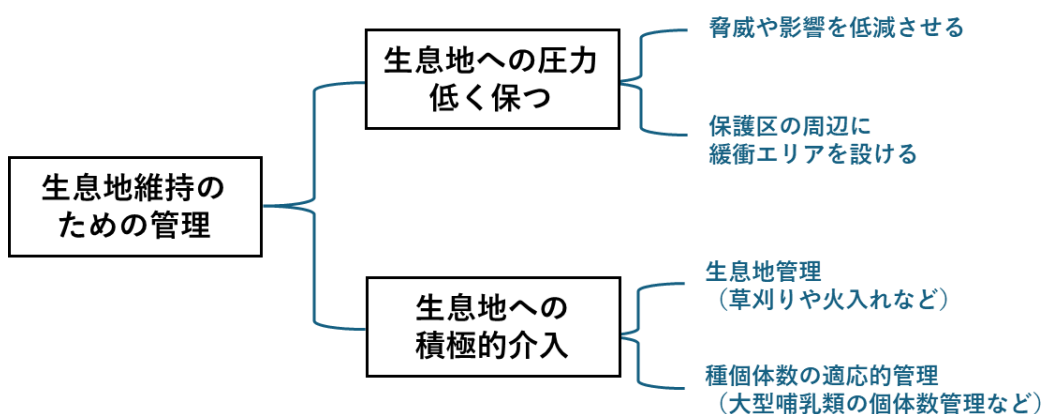


図 5 生息地および個体群の維持に関するアクションの階層構造。これらのアクションの目的は、生息地や個体群の現在の状態を安定に保つことである。

## 8. 費用対効果、エビデンスベース、その他の考慮事項

セクション3～7では、セクション2でまとめられた基準の違いに基づき、自然に優しいアクションの分類を示してきた。現場での実践に投資するという観点からは、費用対効果 *cost-effectiveness* が主要な検討事項であり、限られた資源のもとでは極めて重要である。費用対効果を評価するためには、コストと効果の双方の推定が必要となる。

アクションのコストには、実施コストと機会費用の両方が含まれる。実施コストには、土地の取得、計画策定、現場での実施、行政上のコスト、モニタリング費用などが含まれる。一般的な生息地タイプで一般的なアクションを行う場合、そのコストはおおよそ把握されていると考えられるが、まれな生息地タイプでは実証的なデータが限られている可能性がある。モニタリングのコストは、監視期間の長さ、監視対象地域の規模、空間解像度、追跡する生物多様性要素の数によって大きく左右される。効果 *effectiveness*、実現可能性 *feasibility*、信頼性 *credibility* は互いに密接に関連している。アクションの実現可能性は、その実装に関する経験や事例があれば理解しやすいが、先行事例がない場合、例えば新しいタイプの生息地回復アクションの成功には大きな不確実性が伴う。この不確実性は、当該アクションから推定される効果(利益)を減少させる要因となる。

自然に優しいアクションが、環境のための自主的な取り組みとして行われる場合、その効果を定量的に測定することは必ずしも重要ではない(自発的なアクション *voluntary nature-friendly actions*)。この場合の主眼は、「生態学的に有益な行動が実際に行われた」という事実そのものである。一方で、生物多様性オフセットや生物多様性クレジットのように、行動の結果が制度的に評価される場合には、得られた利益 *gains/benefits* の定量化が不可欠である。アクションの結果として生息地の状態や個体群サイズがどの程度改善されたかについて、何らかの推定が必要となる。また、どのくらいの期間で効果が得られるかも重要である。たとえば森林の回復のようなアクションは、成果が現れるまでに数十年から数百年を要することがある。芝生がすぐに成熟した原生林に変わるかのように評価することは許されない。したがって、特定の期間におけるアクションの時間応答関数 *time response function* を設定し、生息地の質の時間的変化を生態学的効果の推定に用いる必要がある。参照>このような応答関数については、ドキュメント#5で詳説している。

現時点では信頼できる回復手法が知られていない生息地タイプも存在することに留意する必要がある。こうした事実は、空間的インパクト回避の重要性につながっている。

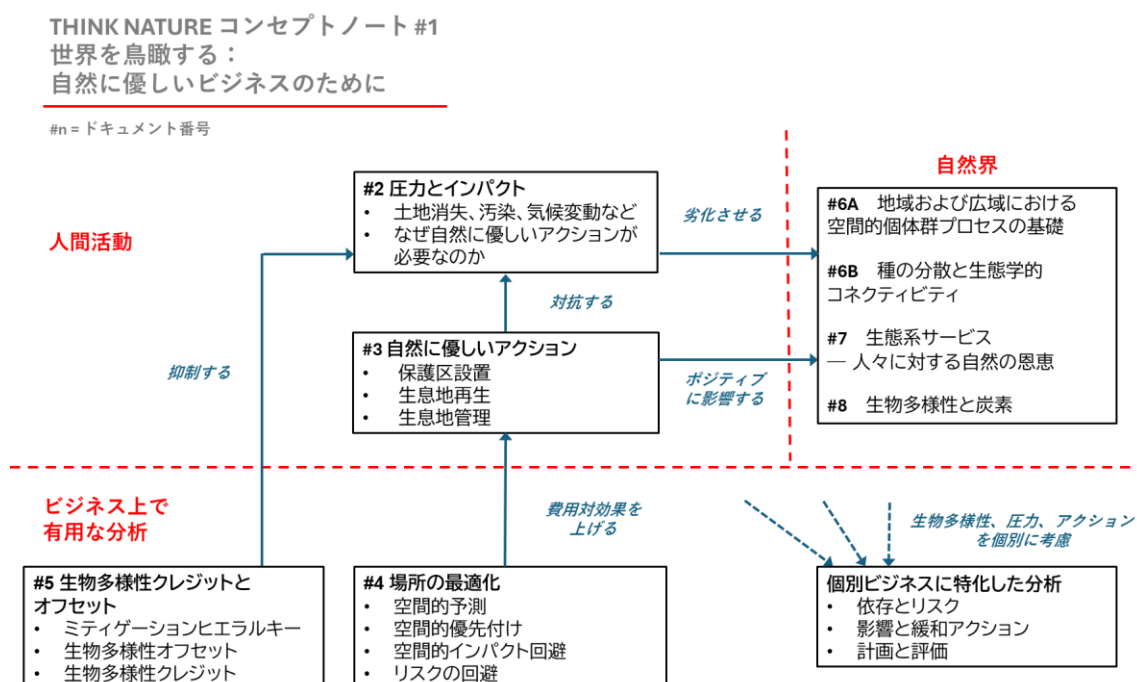


## 9. シンク・ネイチャーの考え方

自然に優しいアクションは、さまざまな目的のために実施することができる。その力学的な効果を概念的にしっかりと理解することは、目の前の課題に最も適したアクションを選択するうえで重要である。文献で十分に知られていないアクションもあるため、その効果、実現可能性、コストに関する実証的なエビデンスを蓄積していくことも重要である。アクションの実施内容を記録・公開することは、透明性の確保にもつながる。

シンク・ネイチャーは、空間的な課題に対して的確に構築された空間的優先順位づけ spatial prioritization を用いて対応している。また、ミティゲーション・ヒエラルキー mitigation hierarchy や生物多様性オフセット biodiversity offsets の枠組みは、影響の補償や生物多様性クレジットの創出に活用できる。参照＞これらの発展的テーマは、ドキュメント#4、#5 に記載されている。

アクションの目的が何であれ、自然に優しいアクションは、自然状態を改善させる。



ビジネスの視点から整理した人と自然の機能的関わり(ドキュメント#1 より)

## 文献目録

- Batáry, P., Dicks, L.V., Kleijn, D. & Sutherland, W.J. (2015). The role of agri-environment schemes in conservation and environmental management. *CONSERVATION BIOLOGY*, 29, 1006-1016.
- Beher, J., Treml, E. & Wintle, B. (2024). 10 years of decision-making for biodiversity conservation actions: A systematic literature review. *CONSERVATION SCIENCE AND PRACTICE*, 6.
- Gaston, K.J., Jackson, S.E., Cantú-Salazar, L. & Cruz-Piñon, G. (2008). The Ecological Performance of Protected Areas. *ANNUAL REVIEW OF ECOLOGY EVOLUTION AND SYSTEMATICS*, 39, 93-113.
- Geldmann, J., Barnes, M., Coad, L., Craigie, I.D., Hockings, M. & Burgess, N.D. (2013). Effectiveness of terrestrial protected areas in reducing habitat loss and population declines. *BIOLOGICAL CONSERVATION*, 161, 230-238.
- Gibson, L., Lee, T.M., Koh, L.P., Brook, B.W., Gardner, T.A., Barlow, J. *et al.* (2011). Primary forests are irreplaceable for sustaining tropical biodiversity. *NATURE*, 478, 378-+.
- Gilby, B., Olds, A.D., Connolly, R.M., Henderson, C.J. & Schlacher, T.A. (2018). Spatial Restoration Ecology: Placing Restoration in a Landscape Context. *BIOSCIENCE*, 68, 1007-1019.
- Hale, R., Mac Nally, R., Blumstein, D.T. & Swearer, S.E. (2019). Evaluating where and how habitat restoration is undertaken for animals. *RESTORATION ECOLOGY*, 27, 775-781.
- Heller, N.E. & Zavaleta, E.S. (2009). Biodiversity management in the face of climate change: A review of 22 years of recommendations. *BIOLOGICAL CONSERVATION*, 142, 14-32.
- Hoffmann, S. (2022). Challenges and opportunities of area-based conservation in reaching biodiversity and sustainability goals. *BIODIVERSITY AND CONSERVATION*, 31, 325-352.
- Langhammer, P.F., Bull, J.W., Bicknell, J.E., Oakley, J.L., Brown, M.H., Bruford, M.W. *et al.* (2024). The positive impact of conservation action. *SCIENCE*, 384, 453-458.
- Lester, S.E., Halpern, B.S., Grorud-Colvert, K., Lubchenco, J., Ruttenberg, B.I., Gaines, S.D. *et al.* (2009). Biological effects within no-take marine reserves: a global synthesis. *MARINE ECOLOGY PROGRESS SERIES*, 384, 33-46.
- Loch, J.M.H., Walters, L.J. & Cook, G.S. (2020). Recovering trophic structure through habitat restoration: A review. *FOOD WEBS*, 25.
- Maron, M., Hobbs, R.J., Moilanen, A., Matthews, J.W., Christie, K., Gardner, T.A. *et al.* (2012). Faustian bargains? Restoration realities in the context of biodiversity offset policies. *BIOLOGICAL CONSERVATION*, 155, 141-148.
- Moilanen, A., Laitila, J., Vaahtoranta, T., Dicks, L.V. & Sutherland, W.J. (2014). Structured analysis of conservation strategies applied to temporary conservation. *BIOLOGICAL CONSERVATION*, 170, 188-197.

- Pienkowski, T., Cook, C., Verma, M. & Carrasco, L.R. (2021). Conservation cost-effectiveness: a review of the evidence base. *CONSERVATION SCIENCE AND PRACTICE*, 3.
- Simkins, A.T., Sutherland, W.J., Dicks, L.V., Hilton-Taylor, C., Grace, M.K., Butchart, S.H.M. *et al.* (2025). Past conservation efforts reveal which actions lead to positive outcomes for species. *PLOS BIOLOGY*, 23.
- Sutherland, W.J., Taylor, N.G., MacFarlane, D., Amano, T., Christie, A.P., Dicks, L.V. *et al.* (2019). Building a tool to overcome barriers in research-implementation spaces: The Conservation Evidence database. *BIOLOGICAL CONSERVATION*, 238.



シンク・ネイチャーの「四方よし」

売り手よし、買い手よし、世間よし。

そして自然によし。